

第 19 代大森代官 井戸平左衛門の偉業と 500 基を超える頌徳碑

大田市文化協会会長 石 賀 了

■井戸平左衛門公の事蹟

江戸時代、享保の大飢饉に際し、薩摩藩からサツマイモを取り寄せて栽培を奨励して領民を飢饉から救い、今でも「いも代官」として慕われている、石見銀山領の第 19 代大森代官、井戸平左衛門正明（以下「井戸公」）は享保 16 年（1731）11 月に現大田市の大森に着任。2 年後の享保 18 年 5 月に併任地である岡山県の笠岡陣屋で亡くなっており、在任期間はわずかに 1 年半と短い、いまだに名代官として慕われ、数多くの頌徳碑が建てられている。

井戸公は寛文 12 年（1672）、御徒（おかち）、野中八右衛門重貞の子として武蔵に生まれ、21 歳の元禄 5 年（1692）に勘定の井戸平左衛門正和の養子となって小普請に迎えられた。その後、江戸城中の火災の警戒に当たる表火之番に進み、同 15 年（1702）に勘定方に抜擢された。以来、諸国河川の治水工事や幕府直轄領の巡検などを真面目に励み、享保 6 年（1721）、20 年の精勤に対して黄金 2 枚を拝領している。さらに、享保 10 年には諸地域での検見添役（米などの出来具合を検査する役）の功績に対しても黄金 2 枚が贈られており、井戸公の真面目さ、精勤ぶりが偲ばれる。その仕事ぶりを評価されたことが、60 歳という高齢での享保 16 年の代官就任につながったと思われる。

着任翌年の享保 17 年は大飢饉の年となる。この飢饉に際して、井戸公は精力的に自分の足で領内を歩き、実態をつぶさに調べ、被害が大きかった鳥井村、磯竹村（以上現大田市）、黒松村（現江津市）などでは年貢を免除し、真鍋島（現笠岡市）など被害の比較的小さい地域では被害に応じて減免するなど、思い切った救済策を講じた。

また、自らの財産や裕福な領民から募った資金で米を購入するとともに、幕府の許可を待たずに代官所の米蔵を開いて領民に与えたと伝えられている。

極めつけは、まるで大飢饉が来ることを予見していたように、同年の春から夏にかけて、薩摩からサツマイモを取り寄せて栽培を奨励したことだ。このころすでに、普及はしていなかったが江戸にはサツマイモが伝わっていたという記録もあり、井戸公は長年検見添役として諸国を巡見する中で、サツマイモの情報を持っていたと思われる。その上、代官着任 2 年前の享保 14 年（1729）に検見添役として石見を訪れていて、米の実りが少ないことも自分の目で見ており、代官就任に当たって、「石見を救うのはサツマイモしかない」と考えていたと思われる。

サツマイモは年貢の対象にはなっていなかったが、いや、年貢の対象でないからこそ、サツマイモを植え広め、領民が米の代わりに腹一杯に食べてくれれば、きっと元気を出してくれるに違いないと確信したのだと思われる。忠義を何より重んじる井戸公にとって、「忠」とはお上によく仕えるというだけでなく、自分自身に対しても誠実であるということであり、サツマイモ導入には「自分が代官になったからには領民の一人の命も見捨てない」という強い意志が感じられる。

残念ながら、サツマイモ導入の最初の年はほとんどが失敗に終わったが、唯一、福光村の松浦屋与兵衛が栽培に成功し、「いも釜」という保存法を考え出したため、石見では翌享保 18 年から



井戸公肖像画（井戸神社蔵）

栽培が広まることになる。しかし、井戸公はおそらくそのサツマイモを味わうことなく、その年の4月に併任地の笠岡に赴いて病に倒れ、5月26日に帰らぬ人となった。享年62歳。葬儀は笠岡の威徳寺で営まれ、「泰雲院義岳良忠居士」の名が贈られた。

■頌徳碑は中国地方4県に500基以上も

井戸公の死から74年後の文化4年(1807)、那賀郡大田村(現在の江津市松川町)の江川沿いに、建立年がわかるものとしては最も早く、井戸公の頌徳碑が建てられた。その後、頌徳碑建立は銀山領全体に広がり、浜田藩、松江藩、鳥取県、そして広島県、岡山県へと広がっていく。その総数は大田市川合町の故宮本豊氏の調査によると500基以上にものぼる。一人の人間に対する頌徳碑がこれほど多いのはおそらくほかには例がないと思われる。

頌徳碑を建てたのはどんな人たちかを見てみると、それはそれぞれの石碑に刻まれており、ほとんどのものが、村々の人々がお金を出し合い、力を合わせて建てており、台石には「村中のみんなで」という意味の「當村中」とか、「村中みんなが等しく力を合わせて」という意味の「村中合等」などの文字が力強く彫られている。

米が十分にできなかつた地域の人々が決して豊かだったとは思えないが、それでも「サツマイモを取り寄せて私たちを助けてくれ、そのおかげで飢え死にすることなく親から子へ、子から孫へと命がつながった。その殿様に感謝を捧げたい」という人々の思いが、それぞれの石碑に込められている。当時藩外に持ち出すのが難しかったサツマイモを薩摩から入手した井戸公もすごい、その恩に報いようと頌徳碑を建てた後世の人々もまたすごい。その人々は井戸公への感謝の気持ちを表すとともに、サツマイモを通じて食物に感謝し、そして命の尊さを見つめていた人たちだったのだ。

■今も続くまつりや法事。石碑再建の動きも

500基の頌徳碑の中には、長年の風雪で傷んでいるものも多く、彫られた文字が読めなくなるもの、石碑自体がやせ細って崩壊するものもある。そんな井戸公碑を再建する動きも見られる。江津市清見町、和木町、嘉久志町、出雲市湖陵町差海などで見事に再建され、2018年4月の島根県西部地震で倒れた、大田市波根町の波根八幡宮にある井戸公碑も場所を変えて再建された。

頌徳碑にまつわる法事やまつりは、今でも大田市内の数か所で続けられているほか、各地で行われている。県外でも、米子市の迎接院(こうしょういん)、広島県の生口島の正善寺などでにぎやかに続けられている。

現代の日本では、コメのかわりにサツマイモを食べることはなくなったが、それでも、井戸公の数々の事蹟はいまだに語り継がれ、その恩に報いようと建てられた500基以上の頌徳碑は、今でも各地で大切に守られている。

【参考文献】「石見銀山〜いも代官井戸平左衛門の事蹟」(平成13年大田市外2町広域行政組合企画担当) / 「いも神さま 井戸平左衛門 石見銀山代官」(石村勝郎著)(平成6年石見銀山資料館) / 「日本民衆史7 甘藷の歴史」(宮本常一著)(昭和37年未来社) / 「野國總管甘藷伝来400年祭記念誌『野國總管』」(平成17年沖繩県嘉手納町) / 「代官井戸平左衛門の事蹟と顕彰」(藤原雄高著)(平成29年島根県教育庁発行「石見銀山の社会と経済」に収録) ほか